

令和 7 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21H00641・23K20553

研究課題名（和文）ソーシャルデザインの人類的研究：生活・地域・人をどう生み出すか

研究課題名（英文）An Anthropological Study of Social Design

研究代表者

木村 周平（Kimura, Shuhei）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10512246

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「ソーシャルデザイン」と総称できる領域において文化人類学がどう関わるのかについて、従来の人類学が目指してきた「生を規定する政治や経済の大きな力を批判し、よりよい社会のあり方を模索する」という方向性を受け継ぎつつ練り直し、人類学や近接学問領域の蓄積、さらに公共的な実践に対して貢献することを目指し、研究を行った。期間の前半はコロナ禍により現地での調査は計画通りできなかったが、主にオンラインで複数の関連領域の実践者と対話を行い、後半の2年間では日本文化人類学会研究大会で実務と人類学の境界領域や協働についての2つの分科会を行い、研究誌の特集として出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では文化人類学と実務の境界領域（ビジネスや教育、出版、社会開発、産学連携等の領域で）についての実践事例を蓄積し、それに基づいて文化人類学がどのようなものでありうるのかについて考察を深めた。本研究で行った事例の蓄積と考察は、文化人類学をより広げていくうえで、またより一般的に、学問と社会（産業や行政を含め）との境界領域における協働関係をより具体的に考え、また実践していくうえで、さらに、それぞれの人がキャリアの中で文化人類学を学び、活用していくことを実践するうえで、重要な貢献であり、「学術的」あるいは「社会的」のように括れない、両者の境界を乗り越えていくような意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：Following cultural anthropology's exploration of a better world and critique of the major political and economic forces that define our lives, this study has examined what cultural anthropology can do in the field of social design. Collecting case studies on the boundary areas between cultural anthropology and non-research activities, and interviewing practitioners in several related fields, we held two panels on the boundary areas and collaboration between non-academic practices and anthropology at the meetings of the Japanese Society of Cultural Anthropology, which were published as a special issue in the research journal. This study is an important contribution to the redefinition of what cultural anthropology can be, and more generally, to the creative consideration and practice of collaborative relationships at the interface between academia and society.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 ソーシャルデザイン 地域 生活

1. 研究開始当初の背景

現在、デザインを通して社会をよりよいものにしよう、社会課題を解決しようという「善い」・「ヒューマンスケールの」・「コンテクストに応じた」営為が、様々な領域で行われている。そうした営為は「ソーシャルデザイン」と総称できる。このソーシャルデザインという言葉は、2000年代以降、多くの分野の活動を指すのに使われるようになっていく。

実はソーシャルデザインは早くから文化人類学とつながりを持っていた。というのは、「ソーシャルデザイン」という言葉の普及に一役買った「デザイン思考」の出発点において、フィールドワークにもとづくインサイトをデザインのプロセスに取り入れることが目指されていたからだ。そこには、デザインという営為を、専門的なデザイナーの専門技術とするのではなく、一般的な人びとの手の届くものにし、多様な人びとを巻き込み、協働でよりよい社会をデザインしていくという、民主的な志向性も含まれていた。

現場の観察から創造的なひらめきを得て、それを形にしていこうとする「デザイン思考」がビジネスやアート、教育などの諸領域に広まるなかで、同時代的な文化人類学の側にも影響を与えている。つまり、これら諸領域と文化人類学の協働や、文化人類学からのデザインへの研究/実践の動き (Escobar 2018) さらに人類学を学んだ人材がこうした領域で活躍するという事態が進んでいるのだ。しかしその一方で、ビジネス側では(過度に)専門化した文化人類学に頼らず人材を再生産し、必ずしも文化人類学の専門教育(大学院等)を経験していない「エスノグラファー」や「人類学者」が生まれ、文化人類学側でも、産学連携などの事業において、あたかも「ジギョウアドバイザー」や「コミュニティデザイナー」、「PBL 教育専門家」のような役割をこなしたりしている。

このような、いわば“活気ある錯綜状態”が、研究開始当初の背景である。この状況に対してノの中で、文化人類学(者)はどのような立ち位置を取ることができるのか。こうした対象と研究者との「近さ」を論点の一つとしてきた現代人類学では、「自己/他者」的な対立ではない形で、現場での実践を描き出し、現場の枠組みを使いながら文化人類学のあり方や類似や差異を考え直すことが行われてきた。そうした蓄積を利用しながら、どのように文化人類学的な批判の視座を作り直していくかということが、本研究の開始当初の課題であった。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような背景のもと、広く「ソーシャルデザイン」に関わる協働についての事例蓄積と、それを通じた文化人類学に関する再考を目的として、研究を進めてきた。

事例蓄積にあたっては、(1)生活(暮らしに関わるモノやサービスのデザイン)・(2)地域(コミュニティ活性化に関わるデザインやプランニング)・(3)人(教育のプログラムやコンテンツなど)という領域を設定した。

そのうえで、ソーシャルデザインに関わる人として、多様なバックグラウンドと経歴、肩書を持ち、柔軟に概念、モデル、ツールを組み合わせ、現場でいろいろな立場のアクターと関わりながらプロジェクトを進める人々を取り上げ、彼・彼女ら(当初は「準専門家」と呼んだが、この名称は研究開始後にかえて誤解を招くことが分かり、使わなくなった)によるソーシャルデザインの実践が、大きなフレームワークと具体的なコンテクストの間で、どのように現場で実践し、どのようにデザインを生み出し、社会を作りだそうとしているのか、そうした活動のなかで動員と自発性のジレンマがどう現れているのかを明らかにし、人類学の営為と比較しつつ批判的視座を作り直すことを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、

(1) ソーシャルデザインに関わる活動の形成に関わる文献調査

例えばビジネスの領域では、調査手法としての「エスノグラフィ」、人間中心デザイン(HCD)やユーザーエクスペリエンス(UX)などの概念を通じて、消費者(生活者)の生活のより厚みのあるイメージを描いたり、その潜在的ニーズを把握しつつ「モノやサービスを通して何を実現するか」というビジョンをもって商品を生み出し、人々の生活に働きかけるプロセスを、企業の開発部門や、マーケティング会社のリサーチャー等が行っている。そこにおいて、調査から商品化へのプロセス、そこでの「生活」「未来」などの概念のありようを、ビジネス人類学の蓄積をふまえながら明らかにすることを目指した。

(2) 個々のメンバーが自身の関与する現場において行うフィールドワーク

(3) 当初「準専門家」と呼んだ人々に対するオンラインでのインタビュー

を行った。また、

(4) 定期的にオンライン研究会を行うことで、成果の共有とディスカッションを通じた枠組みの形成を進め、それを ~ を行う上で活用した。

4. 研究成果

本研究を遂行した4年間のうち、前半2年間は、コロナ禍、および研究代表者の在外研究(国際共同研究強化科研による)のため、メンバー同士での共同フィールドワークを行うことができなかった。結果として、調査期間全体にわたって、各自での調査を進めつつ、オンライン研究会で報告・議論するという形で進めた。

上記(1)としては、「ソーシャルデザイン」「ソーシャル・イノベーション」の系譜と日本における展開史、「社会学」という分野の創設とその分野出身者による地方での社会開発などが取り上げられた(これらは単体では公表されていないが、一部はメンバーが発表した著書や論文のなかで展開されている)。

次に(2)としては、企業と連携した地方での教育開発、様々な産官学連携、などが取り上げられた。その成果は、後述する学会での分科会や特集として刊行された。

また(3)としては、企業に所属し「まちづくり」に関わる文化人類学者、大学の経営者として企業や地方自治体等と連携する文化人類学者、NGOやまちづくり会社スタッフなどを経て、地域共生を目指しソーシャル・イノベーション教育を行う新しい全寮制の高専の教員となった方、学生時代から農家と消費者をつなぐグリーンツーリズムに関わり、地域で実働性のあるプラットフォームづくりに取り組むNPO職員、大学で文化人類学を学び広告産業に関わるビジネスマンなどに対する聞き取りを行った。

以上の取り組みをもとに(4)でのディスカッションを行いながら、年次報告書で示しているような論文・書籍・口頭発表がなされた。そのなかでも、日本文化人類学会で行われた以下の2つの分科会は中心的な成果だといえる。

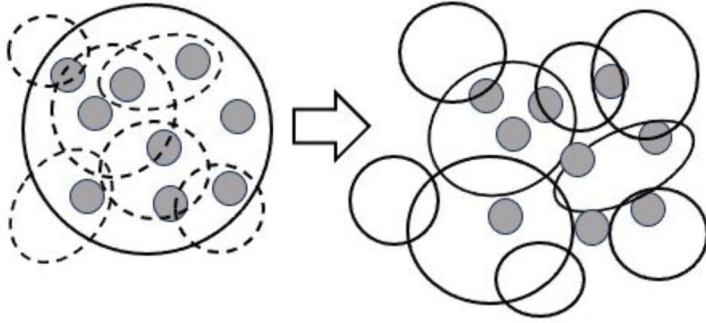
文化人類学と業務の関係性

2023年の日本文化人類学会では、「文化人類学を「業務」からリ・デザインする」「社会課題」と「連携」の獲得免疫化に向けて」と題する分科会を行い、研究メンバーを中心に発表した。目的としては、文化人類学者が実際に携わる「研究」に関わる実践と見なされにくい(自分にとっても見なしにくい)領域の実践——研究教育機関で職務として要請される各種の連携事業や、非研究機関で仕事として行う調査レポートや報告書作成、研究助成選考など所属機関外での非アカデミアとのやり取りなど——の検討を通じて、人類学的実践の可能性を拡張しようとするのであった。発表としては、「フィールドで小さな問いを立てる」と題した海外学生引率業務が取り上げた発表、「複数性とハブ」と題した、大学経営を取り上げた発表、「パブリックセクター向け調査研究と人類学・民俗学」と題した、民間シンクタンクでの業務としての調査を取り上げた発表、「専門家でもなく、素人でもなく」と題した、コロナ禍初期の遠隔授業の設計と運営を大学の他のスタッフと協働しながら行った実践を取り上げた発表が行われた。文化人類学(特に研究)と、それ以外の「業務」とを切り離して考えるのではなく、「業務」のなかに学問的な可能性を見だしていこうとする姿勢に対し、シニア・若手含めた多くの参加者から好意的な反応を得、学会内外での新たな動きを刺激した。

文化人類学と近接分野実務との関係性

2024年の日本文化人類学会では「文化人類学とは何でありうるのか—協働、対話、反転の試み」と題した分科会を行い、年度末に『文化人類学研究』誌で特集として公刊された。そこでは、これまでの議論を踏まえ、文化人類学(特に研究)と、それに近接する様々な実務との関係性を考え、線引きするのではなく、むしろ地続きのものとして捉えることで文化人類学を拡張していくという方向性を示した。分科会発表と特集論文は、いずれも文化人類学者と、必ずしもそのように名乗らない者との共著として執筆された。具体的には、「人類学を編集する」という、文化人類学者と編集者兼出版社経営者による論考、「人類学的なるもの」と「学び」の生成空間」という、文化人類学者と中等教育者による論考、企業エスノグラファーと文化人類学者による「人類学によるデザインに向けて」、「未来志向の人類学はいかにして実現するか」という、人類学ベンチャー企業を立ち上げた者とシンクタンク職員による共著、教学IRに関わる文化人類学者とイノベーション・エージェントによる「調査者」として関わらないインハウス人類学的実践」である。これら論考に対してデザイン人類学に関わる人類学者や編集者などからのコメントも掲載された。

ここでは「アンソロスケープ」「人類学的デザイナー」「グッド・アンソロポロジー」など、今後の研究や諸活動の展開につながる概念やアイデアが示された。また、代表者による序文では、以下の図(木村 2025)のように文化人類学を考え直すことを提案している。



左図：「文化人類学」という全体（実線）、その要素としての「文化人類学的なもの」（色つきの丸）、その要素を持つ個々人（点線）
右図：個人やプロジェクト、組織など多様な全体（実線）と、それぞれの要素であったりなかったりする「文化人類学的なもの」

こうした成果は、文化人類学とそれ以外の厳密な線引きを行ったのではない。むしろ、社会の様々なプロジェクトの中でどう人類学的要素が参入していくのか、どのようにしてその可能性を広げるのか、という学問の未来志向的なあり方についての重要な貢献をなしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木村 周平	4. 巻 24
2. 論文標題 コメント 「コモン・スキル」としての文化人類学に向けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学研究	6. 最初と最後の頁 126 ~ 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32262/wsca.24.126	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安藤 昌也、伊藤 泰信	4. 巻 25
2. 論文標題 人工知能を活用するシステムにおける人間中心設計のあり方	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヒューマンインタフェース学会論文誌	6. 最初と最後の頁 127 ~ 138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11184/his.25.2_127	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木村周平	4. 巻 87巻4号
2. 論文標題 共有、旅人、新しい人間 東日本大震災後の災害人類学の展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻本侑生	4. 巻 39
2. 論文標題 渋谷敬三と銀行調査部 「二足の草鞋」が拓く社会的実践の可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 歴史と民俗	6. 最初と最後の頁 217-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻本侑生	4. 巻 41巻4号
2. 論文標題 「農業集落」の多様性と複雑性 集落を捉える空間的視座の系譜と可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 農村計画学会誌	6. 最初と最後の頁 175-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早川公	4. 巻 21巻1号
2. 論文標題 統治されない技法 の教育の実装に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関係性の教育学	6. 最初と最後の頁 145 - 162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51077/epajournal.21.1_145	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Oikawa Sayaka, Iida Junko, Ito Yasunobu, Nishigori Hiroshi	4. 巻 22
2. 論文標題 Cultivating cultural awareness among medical educators by integrating cultural anthropology in faculty development: an action research study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMC Medical Education	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12909-022-03260-7	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 306
2. 論文標題 「あしもとの歴史」から考える共有の民俗学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Onoda Takashi, Ito Yasunobu	4. 巻 scac002
2. 論文標題 On the boundary of services and research collaborations in Japanese state-of-the-art academic research infrastructures	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Science and Public Policy	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/scipol/scac002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Oikawa Sayaka, Iida Junko, Ito Yasunobu, Nishigori Hiroshi	4. 巻 22
2. 論文標題 Cultivating cultural awareness among medical educators by integrating cultural anthropology in faculty development: an action research study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMC Medical Education	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12909-022-03260-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 24
2. 論文標題 エスノグラフィと生成変化 宮本常一の民族誌的实践を事例としたそのエイジェンシーに関する分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教大学観光学部紀要	6. 最初と最後の頁 40-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 早川 公, 木村 周平
2. 発表標題 文化人類学を「業務」からリ・デザインする 「社会課題」と「連携」の獲得免疫化に向けて
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 早川公
2. 発表標題 専門家でもなく、素人でもなく 大学の非常時遠隔授業設計・運営における応用的実践から
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 門田 岳久, 小西 公大
2. 発表標題 フィールドで小さな問いを立てる 海外学生引率業務に見る人類学的フィールドワークの布置
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辻本 侑生
2. 発表標題 パブリックセクター向け調査研究と人類学・民俗学
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松園美帆, 伊藤泰信
2. 発表標題 人類学的な視点を取り入れたデザインコンセプトワークショップ 新規サービス「メルカード」の立ち上げを事例として
3. 学会等名 日本デザイン学会第70回春季研究発表大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Chika Watanabe, Shuhei Kimura
2. 発表標題 Global Connections through Playfulness
3. 学会等名 Northern European Emergency and Disaster Studies Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻本侑生, 倉田慧一
2. 発表標題 探究の場としての上池袋・木賃アパートの歴史的背景
3. 学会等名 現代民俗学会第67回研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小西公大
2. 発表標題 溶解する臨床：文化人類学とフィールド教育の可能性
3. 学会等名 ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業 キックオフシンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小西公大
2. 発表標題 音楽の<継承>へのまなざし：文化人類学と音楽教育学の対話
3. 学会等名 日本音楽教育学会 第53回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 山川修・早川公	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 136
3. 書名 ディープ・アクティブラーニングのはじめ方 つながりのなかに主体性を取り戻す	

1. 著者名 門田岳久	4. 発行年 2023年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 420
3. 書名 宮本常一 抵抗 の民俗学	

1. 著者名 及川 祥平、川松 あかり、辻本 侑生	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 384
3. 書名 生きづらさの民俗学	

1. 著者名 茂木謙之介・大嶋えり子・小泉勇人 編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 雷音学術出版社	5. 総ページ数 181
3. 書名 コロナとアカデミア	

1. 著者名 北野真帆、内藤直樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 336
3. 書名 コロナ禍を生きる大学生	

1. 著者名 山川修、早川公	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 150
3. 書名 ディープ・アクティブラーニングのはじめ方	

1. 著者名 床呂 郁哉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 368
3. 書名 わざの人類学	

1. 著者名 北野真帆、内藤直樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 336
3. 書名 コロナ禍を生きる大学生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小西 公大 (Konishi Kodai) (30609996)	東京学芸大学・教育学部・准教授 (12604)	
研究分担者	伊藤 泰信 (Ito Yasunobu) (40369864)	北陸先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科・教授 (13302)	
研究分担者	内藤 直樹 (Naito Naoki) (70467421)	徳島大学・大学院社会産業理工学研究部(社会総合科学域)・准教授 (16101)	
研究分担者	辻本 侑生 (Tsuji moto Yuki) (80958950)	静岡大学・地域創造教育センター・講師 (13801)	
研究分担者	門田 岳久 (Kadota Takehisa) (90633529)	立教大学・観光学部・教授 (32686)	
研究分担者	早川 公 (Hayakawa Ko) (90804253)	東京大学・先端科学技術研究センター・特任准教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------